

## 妻の断捨離 1

整理整頓、その考え方を当世風にバツサリと「断捨離」などというようになって久しい。

僕が思い出せない昔の仲間の名前を、数日前から思い起こそうとして、どうしても思い浮かばないため、妻に「知ってるかなあ？」と、駄目元で訊いてみた。するとすかさず、「田中さん?」。そ、そのとおり! その見事な回答ぶりに思わず笑ってしまう。彼女の旧姓だから覚えていた? そうではないという。

歌手、スポーツ選手、作家など、有名人の名前はおろか現役時代の僕の職場関係者まで、とにかく人の名前をよく思い出してくれるのだ。随分昔からの覚書帖のようなものも、その辺の乱雑な棚の中に忍ばせてあって、直ぐに取り出し役立てる場合もある。またある時は浄水蛇口を変えようと思い、蛇口の先端を調べていた。すると、確か取り替えたね、と云いながら、妻が台所の隅を「ごそごそやっている。そうしてその先端部の替え口を出して見せたのだ。

十二、三年前に取り替えたのだった。とんと僕には覚えがない。しかし妻には記憶があった。どうやって覚えていたんだろう? 長い間、そばに居て思うが、妻の整理整頓はお世辞にも褒められない。僕はグラフィックデザインをかじった経歴だ。文字や図形の配置などはミリ単位で神経を使っていたので、部屋の中の家具や備品や小物の置き方も、きちっとしていないと気が済まない。そういう自分の尺度からいえば、妻のそれはめちゃくちゃである。妻が図書館Ⅱ役所出身ということもあって、そういう役所は乱雑で酷かったとよく揶揄したものだ。

およそ役所というところはどこも机の上やその回りを雑多な書類の山にして、その中に埋もれるように仕事をしていた印象があったが、しかしひよっとして、それが彼等の、我々には考えも付かない知恵により、その当人にしか搜し当てられない出し入れ法を持っていたのかも知れない。物理的整え方でなく、頭の中で整えているのだ。妻はその役所の流儀をそのまま持ち込んでいたのだった。

それが分かるようになって、最近は整理整頓のことは云わない。いや、云えない。これまでのドラえもんのような、驚かされる魔術的引き出しに接するたび、整理が悪いから見つからないとか、整頓がどうか文句を云えないのだ。妻なりの頭の中に整理整頓の仕方があるのだ。

それを今様の「断捨離」風に云えば、「断は」整頓を断念すること、「捨」は捨てないこと、「離」は散らかすこと。要は頭で整えているのだ。

(6組・榮君が初心者塾を開いてくれた際、この散文を短歌に試みたことがあった)